

農家民泊で子どもたちが学ぶ「農村生活」

～長野県飯田市

農家に泊ってもらおうという新しい形態の宿泊事業が、各地で少しずつ広がりつつある。そのなかで群を抜いた取り組みとなったのが、長野県飯田市だ。450戸の農家がまとめ、修学旅行生を迎える農家民泊が行われている。



取材協力／飯田市、地域再生診療所：井上弘司、株南信州観光公社

2007年の飯田市の農家民泊の実績は、116校、延べ2万2,000泊。経済効果は8億円になるだろうという。2泊3日で、1泊は一般の旅館、1泊は農家に泊まる。農家では、農作業の手伝いや夜の料理作りと、ふつうの農家の暮らしにふれる。この活動は、飯田市の観光課と農家の試験的な活動から始まり、1998年から本格化して大きな広がりとなった。

08年には総務省と農林水産省、文部科学省の新規事業「子ども農山漁村交流プロジェクト」が発足。小学校5年生を対象に、1週間の農村体験をする活動が始まった。5年間で2万3,000校、120万人の受け入れ態勢づくりをめざしている。全国のモデル地域は50地域。これには大きな国家予算がついた。

飯田市では、全国からの小学校の視察が相次い

でおり、夏から秋にかけて本格的な受け入れが始まる。

南信州型の独自のスタイルを構築

農家に泊まる修学旅行の営業を一手に引き受けているのは、株式会社南信州観光公社。市町村、JA、地元旅行会社が出資した会社だ。代表には、民間の旅行会社に勤務していた新井徳二さんが招かれた。

「田植え、五平餅^{もち}作りなどの体験と、農家に泊まるという組み合わせの南信州型の独自のスタイルが生まれた。体験は163品目。毎年、少しずつ増やしてきました。

農家のふだんの姿や生き方を見てもらう。農家

「今田平地区の田んぼの体験」



子どもは腰に苗籠をつけて説明を聞いてから田んぼに入る



1チームが1枚の田んぼをすべて田植えする



有限会社今田平のみなさん。右から3人目が代表の大平盛男さん



田植え後、地区の農家の人が生徒を迎えて宿泊となる

「飯田市では地域にあるもの、できることを総動員して163の体験メニューがつけられた」



五平餅作り



そば打ち



ラフティング

は宿泊や農産加工品が売れたり、体験でお金になったりと副収入になる。子どもたちが増えることで活気が生まれる。休耕田の農地が体験で復活もした。なにより、お年寄りに活動の場ができて元気になった」

と、うれしそうに新井さんは語った。

南信州観光公社が農家民泊の手配、体験内容のパンフレットを作成し、それを修学旅行用として学校に営業を行う。

体験はそば打ち、木工、パン焼き、草木染め、カヌーや溪流釣りなどなど、地域でできるものを主体にメニュー化されている。すべて料金設定がしてあり、これらの体験講座には民間の人たちが多くかかわっている。市民インストラクターは、時給1,000円が支払われるシステム。約1,000人が登録されている。

農家の宿泊は、1泊2日で6,500円ほど。体験料金を入ると8,000円くらいというのが目安だ。体験講座を開くにあたっての接客や実習などの研修会も年2回実施されている。

「多くのインストラクターがいないとできない。住民、農家などのお互いの理解、協力者がいて初めてできることです」と新井さん。

田植えはすべて生徒たちの手植え

5、6月は、中学校の修学旅行が最も多い時期。さまざまな体験が農村部や山間部などで展開される。

そのなかで、今田平地区では、地区すべての田んぼを、修学旅行生の体験で手植えで行っている。運営は地域の農家や退職者でつくった有限会社今田平。現在、11人がメンバーだ。

「生徒にいかに田植えをしてもらおうか。マニュアルをつくり、田植えの説明をして、いっせいに田に入り、うまくやってもらえるようになるまで3年かかりました。田植えをした米は、1人1kgを送ります。残った米は、五平餅作り体験にまわります」と、代表の大平盛男さん。

田植えを指導している竹下肇さんは語る。

「私たちが始めたのを見て、住民の方から、生徒に手植えをしてほしいという要望が出て、全地域が生徒の手植えになり、休耕地はなくなりました。今年だけで20校1,000人が参加した。5月7日に始まり、最後は6月11日までです。10年間での参加は、延べ1万人になります。卒業生がイチゴ狩りやブドウ狩りの体験に来てくれたり、農家に手紙をくれたりする子もいます。年賀状のやりとりをする



溪流釣り



南信州観光公社の各地の学校の受け入れスケジュール



南信州観光公社代表取締役新井徳二さん

ところもある。都市の子が農村の理解を深めてくれるきっかけになった。長いサイクルで来てもらえるとうれしいです」

たった「1泊」の重み

そもそもこの農家に泊まって体験をするという取り組みは、標高500～600mにある飯田市千栄の農家から広がった。この地域は平地がほとんどなく、ナシ、リンゴ、キウイ、カキなどの果樹を栽培している。

千葉県のある学校の先生が、生徒に五平餅作りを体験させたいということでやってきたことがきっかけだった。実際に体験学習を行うと、子どもがとても感激している。それで泊まったらもっと感激するはずだと、引率してきた先生が熱心に語ったのだ。しかし、最初は、農家で生徒を泊めたことがないので、無理だと断っていたという。ところが、翌年、ヒョウが降り、山間地は冷害となり、果樹が大きな被害をうけた。そこで、千葉の先生の話が話題となり、真剣に取り組みが検討された。農家にはほかに収入の道もない。本格的な農村体験をやってみようとなったのだ。

こうして飯田市のサポートを受けて、農家に泊まり体験をする学校の受け入れが始まった。当時熱心だったのは市の職員で、08年から町づくりのアドバイザーとなった井上弘司さんだ。そして市の協力で本格的な農家民泊が始まった。

その最初の受け入れをしたひとりが、「農家民宿ふれあい農園おおた」を運営する大田いく子さんだ。家族は7人家族で、果樹栽培をしている。

「とにかく先生が熱心だった。たった1泊だけでもみんな泣いたね。泊まると必ず子どもは感激して泣いて帰るね。みんなの悩みを聞いてあげたりする。あとで手紙や電話をくれたりする子もいる」と、大田さん。

現在、千栄地区四十数戸の農家が受け入れを行っている。そして活動は市全体に広がった。



金丸弘美

(かなまる・ひろみ)

食総合プロデューサー。食のワークショップのプランニング、幼稚園から大学まで各学校での食の講座などを手がける。総務省地域力創造アドバイザー。著書に『創造的な食育ワークショップ』（岩波書店）、『給食で育つ賢い子ども』（木楽舎）ほか多数。